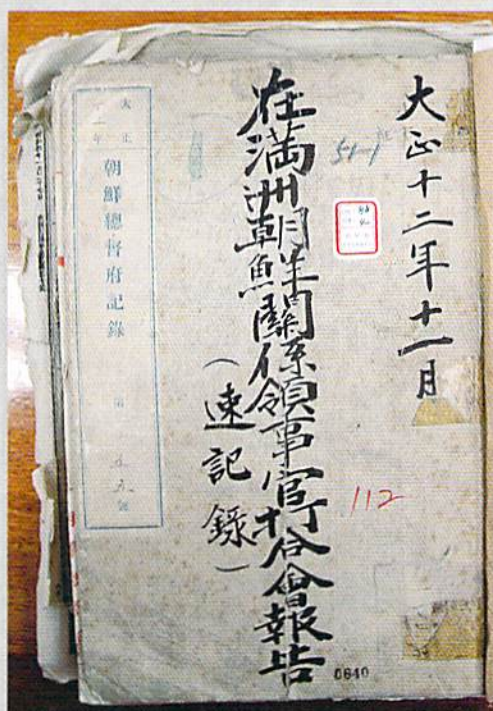


大学共同利用機関法人 人間文化研究機構国文学研究資料館

国文研ニュース

No.15
SPRING 2009



「朝鮮総督府文書」

目次

●メッセージ

新館長の挨拶 今西祐一郎 1

●研究ノート

国際シンポジウム「日本文学の創造物」 鈴木 淳 2

東アジアの歴史研究とアーカイブズ 加藤聖文 4

研究対談 マティ・フォラー 鈴木 淳 8

●トピックス

平成21年度の講演会・展示 11

ポルトガルにおける日本資料専門家欧州協会年次会議 11

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携展示
「百鬼夜行の世界」開催のご案内 12

久保木秀夫助教の中古文学会賞の受賞 13

相田満助教の山下記念研究賞受賞 13

総研大日本文学研究専攻の近況 14

表紙絵紹介 14

新館長の挨拶

国文学研究資料館は、昨年、創立の地、品川区戸越から立川市の新館への移転と、『源氏物語』千年紀という、二大事業を滞りなく成し遂げ、立川での二年目を迎えたところです。就中、『源氏物語』千年紀に関しては『源氏物語』研究の第一人者伊井春樹前館長のリーダーシップのもとに、立川移転記念特別展「源氏物語 千年のかがやき」ならびに人間文化研究機構講演会・シンポジウム 源氏物語一千年紀記念国際源氏物語研究集会「源氏物語の魅力」を主催し、千年紀推進の実働部隊としての大役を果たしました。

真新しく巨大な新館は、じつは国文学研究資料館の占有建物ではなく、大学共同利用機関法人 情報システム研究機構に属する国立極地研究所および統計数理研究所と共用の建物で、この五月には極地研究所、十月には統計数理研究所がここ立川に移転し、大学共同利用機関として立川での本格的な稼働が始まります。

昨年五月の開館式典の時点では、荒野に孤立する人影もまばらな白亜の建物という、やや殺風景な風情を感じさせた当館の環境も、東隣に当館より大きな東京地方裁判所立川支部の八階建てビルが姿をあらわし、大量の植栽を含む周辺環境整備が急ピッチで進められています。さらに西隣には現在立川駅の南側にある立川市役所が新庁舎建設を進めており、来年五月の連休明けには移転が完了する予定です。それに伴い交通網や飲食施設も整備され、当館利用の利便性も一段と向上することが期待されます。

さて、大学共同利用機関法人としての国文学研究資料館は、大学所属の研究者との共同研究や、館および人間文化研究機構内の研究プロジェクトの推進と同時に、創立以来三十余年の歳月をかけて日本全国の研究者に調査員としてご尽力いただいた成果の集積である、マイクロフィルム資料の整理と公開を二本の柱として、一層の努力をしております。また、戸越時代より展示機能も格段に充実しましたので、研究者、さらには一般市民にも開かれた定期的展示を企画し、日本のみならず世界へ向けた国文学からの発信に努めます。

利用者各位におかれても、新しく整備された当館の機能を存分にご活用いただき、国文学研究の進展に寄与していただきたいと存じます。



大学共同利用機関法人人間文化研究機構

国文学研究資料館長 今西 祐一郎

国文学研究資料館、ハーバード大学共催

国際シンポジウム「日本文学の創造物」

鈴木 淳 (国文学研究資料館副館長・文学資源研究系教授)

二〇〇八年十一月、米国ハーバード大学で、同大学建築美術学部及びライシャワー研究所と当国文学研究資料館の共催で、国際シンポジウムが開催された。会期は、二一日(金)、二二日(土)の二日間。ハーバード大学は、マサチューセッツ州ケンブリッジ市にあり、隣接する州都ボストンとはチャールズ川を挟んで北に位置する。いうまでもなく米国の大学界を代表する名門で、とくに言語学、文学、美術史などの人文学の伝統が脈々と受け継がれており、東アジアの研究が充実していることでも知られる。

会場は、人文学のバーカー・センター(Barker Center of the Humanities)にある、トンプソンの名を冠したセミナー・ルームである。『ハーバード探訪』(Harvard Observed, John T. Bethell, Harvard University Press: 1998)によれば、1936年、ロバート・R・バーカーの寄付によって建てられたもので、九七年にリオープンした。さほど広くはないが、中世の装飾的で堅牢な設えをそのまま移したような、ゴージャスで落ち着いた雰囲気の一部屋で、奥中央には立派な暖炉が備え付けられている。大学のキャンパスの東南隅に当たり、遠方の参加者が宿泊したホテル、ハーバードインからは徒歩で二、三分の距離にあるが、ホテル自体が、大学の建築物と調和を図って建てられており、キャンパスの一面に溶け込んでいるような佇まいである。加えて、今回のスポンサーでもあり、燕京図書館資料の特別展示があったライシャワー研究所、また発表資料を中心に、所蔵品の特別展覧が行われたアートミュージアムも、すべてキャンパスの東南部に位置しており、研究発表、資料観覧、食事などがすべて手際よく運べる絶好のロケーションで実施された。

二日間通しての参加者は、およそ三〇

人余りで、国際シンポジウムの一般的なイメージからするとごく少ない印象がある。しかし、お互い発表内容について直接、意見交換する機会を作りなが進めるには、これくらいが有効な規模なのかも知れない。さらに成果を広く共有するためには、報告書や個別論文によって発信すればよい。日本側の参加者は、国文学研究資料館、他大学を併せて二三名、ハーバード大学が大学院生若干を含む一一名、あとは北米各地の研究者等である。日本側は、すべて日本古典文学の研究者であったが、米国側は、古典和歌研究で有名なクランストン教授と奈良絵本など美術史専攻のマコーミック教授の取り合わせの妙もあり、日本文学と美術史専攻の両様の研究者の参加が目立った。海外に渡った日本の資料に絵入りのものが多いという事情もあるが、欧米の日本研究は概して幅広く、文学と美術の協同も当たり前に行われているという印象が強い。

シンポジウムのタイトルは、「日本文学の創造物—書籍・写本・絵巻—」(The Artifact of Literature: Japanese Books, Manuscripts & Illustrated Scrolls)である。二〇日のチェックインの後、数時間して、プログラムと発表原稿が綴じられた冊子が届けられた。もちろん、それ以前から、発表者やディスカサントの原稿が電子メールでやりとりされていたが、遅れていた原稿もあり、すべての原稿がここで出揃ったことになる。使用言語は、日本語、英語いずれでも可という理解であったが、海外の研究者が極力、日本語での研究発表等を心がけてくれたおかげで、過半の発表が日本語となり、日本側の参加者にとっては苦勞が少なくて済んだ。

プログラムは、概略、以下の通りである。
十一月二一日(金)

○基調講演 伊井春樹(国文研)「源

氏物語の場面 絵画化における拡大と縮小」

○第一パネル〈和歌、物語、翻訳〉伊藤鉄也(国文研)「ハーバード大学所蔵『源氏物語』の本文」、ポール・アトキンス(ワシントン大)「ハーバード大学所蔵『明月記』(嘉祿二年九月巻自筆本)について」、海野圭介(ノートルダム清心女子大)「ハーバード大学蔵伝後二条天皇筆『八雲御抄』(藤波切)について」、迫村知子(スワースモア大)「和歌の絵画性とモノ性—ハーバード大学燕京図書館蔵『あふき集』を中心に—」、ディスカサントエドワード・ケイメンズ(エール大)

○美術館所蔵品特別観覧

十一月二二日(土)

○第二パネル〈宗教と説話〉荒木浩(大阪大)「夢の形象、物語のかたち—『清盛の斬首の夢』を端緒に」、楊曉捷(カルガリー大)「『白鼠弥兵衛物語』に中世の幻想を読む—絵画表現を手掛かりに—」、ケラー・キンブロー(コロラド大)「煩惱消滅物語—『為世の草子』における自殺連鎖—」、小峯和明(立教大)「須弥山世界の図像と言説を読む」、ディスカサント徳田和夫(学習院女子大)

○第三パネル〈『もの』としての本〉鈴木淳(国文研)「美術意匠としての日本絵本」、入口敦志(国文研)「師宣の雲—飾り枠小考—」、レーチェル・サンダース(ハーバード大)「武井武雄(1894-1983)『刊本作品』におけるテキストとパラテキスト」、ジョン・ソルト(インディペンデント・スカラー)「モダニティの古色:日本の二十世紀と二十一世紀の前衛ブックデザインの見本集」、ディスカサント 石川透(慶應義塾大)

○特別講演 ハルオ・シラネ(コロンビア大)「テキスト・イメージ・メディア」、最終討議モデレーター 神作研一(金城学院大)

全体として、日本の文学を、巻物、写本、刊本などの原資料のレベルで考察することとし、いわば日本文学のモノとしての

側面に焦点を当てるとというのが、基本的なコンセプトであった。対象は、ハーバード大学のアートミュージアム（もとフォッグ美術館とサクラ美術館）や燕京図書館所蔵の資料が大半を占め、あとはボストン美術館とロサンゼルスプライベート・コレクションが各一つずつである。そもそもハーバード大学アートミュージアム所蔵の日本古典籍資料として特筆すべきは、まず世界的な愛書家として知られるドナルド・ハイド旧蔵の、いわゆるハイド・コレクションであろう。日本資料は、一八〇点ほどと推定されるが、そのすべてが優品と目され、今回のシンポジウムで取り上げられた伝慈円筆『源氏物語』須磨巻・蜻蛉巻や、定家自筆『明月記』（嘉祿二年九月）断簡などは、反町茂雄著『日本の古典籍』（昭和五十九年、八木書店）に紹介がある。

また、フィリップ・ホファー蒐集のコレクション（ハーバード大学の貴重書専門図書館であるホートンライブラリーに一部分蔵）もアートミュージアムの現蔵で、比較的、絵画や書を伴う文学資料に特色がある。今回、対象に挙げられた京都鴨脚家旧蔵『八雲御抄』や松平定信筆『清盛の斬首の夢』と仮題された絵巻、卷子本『日本須弥諸天図』等は、みなホファー・コレクションである。この二つのコレクションから精選した図録が『日本美術と文学における王朝的伝統』（*The Courtly Tradition in Japanese Art and Literature: Selections from the Hofer and Hyde Collections*, John M. Rosenfield, Fumiko E. Cranston, Edwin A. Cranston, Fogg Art Museum Harvard University: 1973）である。その他、『古典文庫』等に紹介された、奈良絵本の天下の孤本『為世の草子』もアートミュージアムの所蔵である。

燕京図書館の日本資料の多くは、上記のコレクションと対極的な性格を有しており、雑本が多いが、雑多で身近な資料の中に意外な掘り出し物が埋もれていることもある。旧蔵者も一様ではないが、その中で目立つのは、卒業生の医者で日本美

術の愛好者でもあり、フェノロサ資料の収集でも知られるアーネスト・スティルマンで、今回の『あふき集』や『花鳥写真図彙』もその蒐集資料に他ならない。ボストン及びその近郊の日本資料の蒐集家として、モースやフェノロサが第一世代だとすると、スティルマンは第二世代、ハイド、ホファーは第三世代といえようか。スティルマンの蒐集品のうちごく貴重なものはホートン・ライブラリーにもある。鳥居に富士山の蔵書票が貼られていることから判別は容易であるが、燕京図書館だけでもその旧蔵本は相当数に上る。

ともかく、今回、当館とハーバード大学が自然な形で連携協力することができたのも、まさに文学のオリジナルな資料の調査研究という当館の使命と、シンポジウムの趣旨がぴったりと一致したからであろう。筆者自身もここ四年間ほどハーバード燕京図書館の古典籍の調査研究に、同図書館の山田久仁子マクヴェイ氏、それに今回の参加者入口、神作両氏と携わってきて、ちょうどその成果を八木書店から『ハーバード燕京図書館の日本古典籍』と題して公刊したところであったこともあり、いっそう感慨深いものとなった。

各発表は、その書誌の整理、諸本間の異同、図様及びテキストの分析、社会背景の考察などで、それぞれ熱の籠もった内容であった。わけでも、中世に係る絵巻、奈良絵本の発表が比較的多かつ

たこともあり、その辺りが質量ともひとつの山を形成していたように思われた。また、近代版画の作家等を取り上げた二つの発表は、本（アーティストブック）のデザインということに焦点を当てたもので、今回のテーマに相応しいものであるとともに、内容も国際的な日本文学研究の一傾向を反映するものとして興味深いものがあった。研究発表でとくに嬉しかったのは、江戸文学史のハワード・ヒベット名誉教授や美術史のジョン・ローゼンフィールド名誉教授が参加し、熱心に耳を傾けていたことである。

会期中、参加者が研究発表以外に余分な気を使わずに快適に過ごせたのは、クランストン、マコーミック両教授をはじめとする、ハーバード大学側の配慮が行き届いていたからである。とくに食事の心配をする必要がなかったことが大きい。朝のコンチネンタル・ブレイクファスト、昼のサンドイッチともバーカーセンターで採ることができた他、第一日の夜は、ライシャワー研究所でレセプションと中華料理のディナー、第二日はホテルのクリムソン・ルームでイタリア料理のディナーのもてなしがあった。とくに最終日、無事、スケジュールが済んでから和やかな気分できに口にしたワインの味は格別であった。他の参加者もみな同じ気持ちであったようで、名残を惜しみ、その後もすぐ向かいのアイランドパブで深夜まで飲み続けることになった。



東アジアの歴史研究とアーカイブズ

加藤 聖文（文学資源研究系助教）

戦後の歴史学では、かつて1960年代から70年代を頂点として帝国主義研究が盛んな時期があったが、1991年のソ連崩壊とほぼ時を同じくして退潮へ向かっていった。こうした流れの象徴的な出来事は、1992年から翌93年までに刊行された『岩波講座 近代日本と植民地』であろう。

現在の研究水準からすれば物足りないとはいえ、多くの研究者が参加した学際的なこのシリーズは、これまでイデオロギー色が強い帝国主義研究からのアプローチが主流であった植民地という存在を相対的かつ客観的に捉える転機となった。そして、これ以降、支配層と被支配層とのあいだの取奪と抵抗といった二元対立に収斂されがちであった「植民地史」から、政治や経済だけではなく社会や文化の変容や発展を重視したより重層的かつ複眼的な「帝国史」が盛んになっていった。

また、これまで日本史なら日本史、中国史なら中国史という枠組みのなかに止まっていたが、こうした各国史別の閉鎖的な研究領域を超え、また歴史学のみならず、政治学・社会学・文学などとの学際的な研究が盛んになっていったことも大きな特徴である。とくに中国史研究の飛躍的な進展が東アジアの地域研究に与えた影響は多大なものがあったといえよう。

このような1990年代前半の史学史的転換期においても一つ重要かつ決定的な出来事は、歴史研究を行ううえで必要不可欠なアーカイブズ（記録資料）の利用環境が劇的に変化したことである。

これまで歴史研究が依拠するアーカイブズは、日本国内に所蔵されるものが中心であった。外交史料館が所蔵する外務省記録や防衛研究所が所蔵する旧陸海軍文書のような行政文書や国会図書館憲政資料室などが所蔵する個人文書、各大学図書館が所蔵する戦前期の刊行資料といったものである。国外では、米国の

国立公文書館や議会図書館などに所蔵されるものが唯一といってよいものであった。

しかし、90年代以降の研究は、こうした国内のアーカイブズだけではなく、台湾・韓国・中国に所蔵されているものを発掘・活用することでまったく新しい研究の展開が可能となっていった。

これは80年代後半から始まった国際政治上の転換が大きな影響を及ぼしていた。すなわち、米ソ冷戦構造の終焉が帝国史研究の発展、さらにはアーカイブズの利用環境に大きく関わっているのである。

■民主化運動とアーカイブズ —台湾・韓国

80年代までは台湾・韓国・中国に所蔵されているアーカイブズをわれわれ日本人が自由に閲覧することは不可能であった。これはそれぞれの国家の政治体制に原因がある。国民党による一党独裁下で戒厳令がまだ解除されていなかった台湾では、中華民国政府や国民党の文書は当然として、日本時代の文書ですら国家機密扱いとされていた。また、軍事政権による支配が続いていた韓国でも外国人に対する文書の公開は極めて厳しい制限があった。さらに、文化大革命の余燼が冷めやらぬ中国ではさらに厳しい状況下にあった。

こうした政治体制が80年代末期から徐々に変化を見せ始めた。台湾と韓国では、経済成長による社会中間層の発展と政治的発言権拡大を求めた民主化運動が広まり、独裁政治体制から民主政治体制へと急激に転換した。またソ連と同じ体制の中国では、ソ連崩壊の二の舞を避けるために改革開放政策を強力に推進、外国人への門戸を広げていった。

民主政治の高度化は、政策決定過程の透明度を高めることによって達成される。国民に対する情報公開とは、政策決定過

程の透明化を意味するのである。そして、政策決定過程の透明化とは、具体的にはアーカイブズの整備ということに尽きる。

政権内部で実施された政策の決定過程において生成される膨大な記録や資料は、生成されたまま何もしなければ政策が決定された途端に消滅する運命にある。しかし、決定された政策が適切であったか失敗であったかの検証は、実施された後（場合によっては数年後、数十年後）に行われるため、生成と検証とのあいだには大きなタイムラグが生じる。すなわち、ある政策によって問題が発生した場合（例えば薬害エイズや年金記録問題など）、その政策の検証が重要になってくるが、検証段階になって政策の決定過程をあらわす記録や資料が何もなければ検証することが不可能となってしまい、結果的に責任所在があいまいなまま国民に対する説明責任も果たせなくなってしまう。

このような事態を防止するためには、政策決定過程において生成された記録・資料を体系的に整理し管理し公開するための特別な施設（アーカイブズ）が必要となる。ちなみに、アーカイブズとは、生成された記録・資料と、それらを保管する施設という二つの意味を持つ。本稿では二つの意味を適宜使い分けているが、若干わかりづらいことをご容赦願いたい。

なお、余談となるが、近代的なアーカイブズはフランスで誕生したが、これはフランス革命の所産であることから明らかなように、西欧ではアーカイブズが市民社会と民主政治を支える必要不可欠なものとしており、現在では欧米諸国がアーカイブズの先進国とされる。一方、これとは別に社会主義国においてもアーカイブズ（ソ連ではアルヒーフ）は高度に発展している。ソ連のような強力な中央集権型の統治体制では、国民のコントロール（個人情報や国家管理）が重要な要素となる。こうした個人の国家管理体制を支えるものとしてアルヒーフは必要不可欠な存在であり、中央から地方の末端にいたるまで各地・各所に設置されていたのである。そして、中国

はソ連型アルヒーフをモデルとして共産党や中央から地方にいたる行政機関、国営企業や教育機関にいたるまで档案館と呼ばれるアーカイブズを必ず置いている。このように、アーカイブズとは民主政治の存在基盤であると同時に、専制政治の権力基盤という諸刃の剣でもある。

さて、本題に戻るとしよう。台湾や韓国において国民の政治参加の結果として誕生した民主政権は、過去の独裁政権との決別と民主政治の発展を国民に約束するために、積極的に情報公開を推進しようとした。その結果、アーカイブズ制度が急速に進むことになったのである。

台湾では、情報公開を求める動きが高まり、アーカイブズとして档案管理局が2001年に新設され、政府文書の公開体制が整備されていった。また、過去の国民党一党独裁時代に起きた人権弾圧の糾明も盛んとなると同時に歴史的な文書の公開も進められた。現在では、清朝末期から中華民国初期の北京政府の文書は中央研究院近代史研究所、国民政府の文書は国史館で公開されて外国人でも自由に閲覧することが可能であり、外交部や国防部の文書も以前に比べるとアクセスが容易になった。また、中国近代史において不可欠な国民党の文書についても国民党において一般に公開されている。こうした台湾におけるアーカイブズ環境の変化が中国近代史研究の深化に大きな影響を与えたといえよう。

一方、日本統治時代の台湾総督府文書や国策会社であった台湾拓殖株式会社文書は国史館台湾文献館（旧称：台湾省文献委員会）に所蔵されている。台湾総督府文書は、文献委員会時代にマイクロフィルムで撮影されていたが、90年代に入ってからデジタル撮影が開始され、現在ではデジタルデータにて閲覧することが可能である。なお、台湾総督府文書のデジタルデータは中央研究院台湾史研究所のホームページにおいて公開されているのでインターネットで閲覧することは可能であるが、こちらは中華民国籍があるもの

みに限定されているため、外国人はネット上では見ることはできない。また、台湾史研究所では、日本統治時代を経験した台湾人を対象とした口述歴史（オーラルヒストリー：台湾ではこのように表現する）の収集を行い、主要なものは出版されている。

韓国でも台湾と同じ時期に民主化が急速に進んだ結果、政府文書の公開が制度化された。しかも、単なる組織上の整備に止まらず、記録管理士（アーキビスト）と呼ばれる人材を教育養成し、各機関に配置を義務づける法的措置まで行ったことは特筆すべきことであった。それによって、かつて政府記録保存所と呼ばれていた韓国のアーカイブズは現在、国家記録院として政府記録の他にも大統領の個人記録をも対象として、大幅に機能を拡充させた。

また、台湾と同様に歴史文書の公開が進み、国家記録院が所蔵する朝鮮総督府文書のデジタル化や文書解題集の刊行など公開体制が整備され、外国人にとっても利用環境が格段に向上した。ただし、朝鮮総督府文書は台湾にある台湾総督府文書と異なり、あくまでも政府の現用文書という性格が強いものであるということが大きな特徴である。

台湾総督府文書や朝鮮総督府文書は、日本時代に作成された行政文書である。行政文書とはその地域の住民生活、すなわち土地所有などの権利関係や水利・鉄道・港湾など公共施設に関わる記録が中心である。こうした住民生活の基本に関わる記録は、その地域の住民や公共施設が存在する限り、統治機関がなんであろうと必要不可欠なものである。そのため、日本の統治が終焉すれば記録としての価値を失うものではなく、日本の統治を引き継いだ統治主体（中華民国や大韓民国）にとっても必要な記録である。したがって、敗戦後も総督府文書は新しい統治主体に引き継がれ、実際の行政運営の参考（現用文書）とされたのである。

韓国ではこうして引き継がれた朝鮮総督府文書は、基本的には歴史文書（非現用文書）としてではなく、政府の行政

文書の一部として活用されてきた。これがアーカイブズ制度が整備されるまで外国人にとってなかなか利用しづらかった最大の要因である。そして、政府の現用文書として使われてきたために、当時の政権にとって必要とされたものしか残っていないという特徴を持つ。すなわち、土地権利や水利関係の文書が中心であって、朝鮮総督府の政策立案に関わる文書が少ないのである。朝鮮総督府文書の利用者は、現在でもかなり多いといえるが、歴史研究のための利用よりも土地権利絡みの訴訟など現実問題に関わる利用が中心である。台湾では、早い段階から台湾総督府文書が歴史文書と現用文書に分けられて、歴史文書とされたものが台湾省文献委員会（国史館台湾文献館の前身）に移管されていたため、政策立案に関わる文書が多く残されている。ただし、朝鮮総督府文書は昭和期文書が多いのに比較して、台湾総督府文書は明治・大正期の文書が中心であって、現用文書として引き継がれたと思われる昭和期文書が少ない。

このように、同じ植民地官庁の行政文書についても、戦後に引き継いだ統治主体によって扱われ方は大きく異なるのである。

さて、韓国の場合、台湾以上にアーカイブズの整備が進んでいるが、民間資料についても国史編纂委員会が中心になって積極的な取り組みが行われている。国史編纂委員会では韓国内の近現代に関わる民間資料の所在調査や収集を計画的に行っているが、口述記録（オーラルヒストリー）の収集と公開も外部の研究者を交えて組織的に行っている。また、口述記録の収集事業は、アメリカなどで行われている体系化された手法も取り入れ、かつ公開に際しては法的問題などのガイドラインも設定したものとなっている点が特徴である。

このように、台湾や韓国では、単に文書資料を中心とした一次資料だけではなく、関係者からの聞き取り調査による口述記録の収集が大きな関心を集めている。その理由としては、近年世界的に盛んな社会史的アプローチによる歴史研究、す

なわち庶民の歴史への関心の高まりが挙げられる。しかし、台湾や韓国といった日本の植民地とされていた地域においてはそれだけが理由ではない。植民地に関わる文書資料は、もっぱら日本語で書かれた支配者側による記録であるため、植民地下に生きた庶民の歴史を知るにはそもそも資料的な限界を持っている。こうした限界を克服するためには記録化されなかった庶民の声を直接聞き出し、新たな記録を作り出す必要が生まれてくる。ここに、台湾や韓国で口述記録が注目される最大の理由があるといえよう。

台湾や韓国で急速に進んだ歴史文書の公開は、民主化運動の所産であって極めて現実的な問題のなかから生まれたものであるが、それは歴史像の見直しとも関連していた。すなわち、日本統治時代の再検証という視座の登場である。

これまでは支配と抵抗という二項対立的な図式を提示することによって、日本の植民地支配の犯罪性とそれに抵抗した英雄という愛国的ナショナリズムを昂揚させることが非民主政権の正当性にも繋がっていた。ある意味において現状への不満を過去への不満へと転化させるものとして歴史は利用されるものであった。

しかし、このような政治性の強い主観的なとらえ方よりも日本時代をより客観的にとらえ、現代の社会構造にどのような影響を与えているのか否か、といった植民地期から現代までの連続性・非連続性を検証しようという気運が高まっていった。こうした機運の背景には、先に述べた政治の民主化の他に、台湾や韓国で80年代以降急速に進んだ経済成長という要因も挙げられる。すなわち、戦後の経済成長は台湾や韓国が持っていた独自の内在的な発展によるものなのか、それとも植民地統治下で進んだ社会インフラや教育の整備などの近代化によるものなのか、といった視点である。

このような経済成長による社会中間層の増大から市民の政治的権利の拡大要求へと発展し、それが自国の歴史像の再検証へと繋がっていったのが80年代から90

年代にかけて台湾や韓国で見られた現象であり、その過程のなかでアーカイブズ（所蔵機関および記録資料の両方）が重視されるようになっていったのである。

しかも、こうした歴史研究の隆盛は、アーカイブズの利用拡大だけでなく書籍への注目にも繋がっている。日本時代に蓄積され敗戦によって現地に引き継がれた教育機関および公共機関の図書館の蔵書もまた90年代以降、整理が進み目録が刊行されたことで書籍を軸とした植民地における社会文化のあり様が明らかになってきたのである。



「国家記録院城南新館」

■現実政治とアーカイブズ —中国

では、台湾や韓国とは異なる社会変化が起きた中国ではどうだろうか。中国においてアーカイブズとは前述したように国家による国民統制の手段であって、市民の権利を保障するものではない。当然のことながら、現在の中国共産党政権において生成されている記録を一般国民が自由に閲覧することはできない。中国では、公的記録から住民の個人情報までを管理するアーカイブズとして檔案館という施設が設けられているが、これは中国共産党の強い監督下にある（業務組織としての檔案局と一対の関係）。また、檔案館には必ず大学院で檔案学を専攻してきたアーキビストが配属されていることから、中国においてアーカイブズがいかに重要なものであるか理解されよう。このように重要な位置づけにある檔案館は、現在の記録だけではなく歴史文書も管理しているが、外部の

人間が歴史文書を閲覧することはなかなか容易ではない。

ただし、改革開放政策以前では外国人が檔案館に入出入りすることは不可能であったが、80年代後半から状況は徐々に変化しつつある。中国でも国家檔案法（1987年公布・1996年改正）が制定されたことによって、法的な公開制度が整えられていった。ただし、国家檔案法では30年を経た政府文書や過去の歴史文書は原則公開とされているものの、必ずしも完全な運用がなされているわけではなく、現場の判断に委ねられている面が大きい。そのため、中国においては、各檔案館によって公開の濃淡が異なっている。

例えば、檔案館のなかでもっとも公開体制が進んでいる一つとして、上海市檔案館が挙げられる。ここでは、外国人の閲覧も比較的容易であるし、歴史文書はもちろん、中華人民共和国時代の文書も一定の期間が過ぎたものは自由に閲覧することができる。閲覧施設と保管庫とが離れているため、出納までの時間がおそろしくかかるという難点はあるものの、それ以外の点では何の問題もない。ちなみに、付設されている展示施設も有料だがなかなか充実している。その一方、上海市檔案館とは逆に歴史文書でも簡単に閲覧することができない檔案館もある。とくに、日本の支配を受けた東北地方の檔案館は難しい問題を抱えているのである。

中国において公開が難しい歴史文書とは、明清時代の檔案ではなく、日本の諸機関によって作成され、敗戦後、中国側に接収された文書である。具体的には、満洲国政府や関東軍、満鉄などが作成して保管していた文書である。これらは、遼寧省檔案館や吉林省檔案館、黒竜江省檔案館など省レベルのものから、大連市檔案館や撫順市檔案館など市レベルの檔案館にいたる東北各地の檔案館に多かれ少なかれ所蔵されており、日本の満洲支配を解き明かす重要な文書であるといえよう。しかし、これらの文書の多くは、個人的ルートによって特別に見せてもらう以外に

は、誰でも自由に閲覧することはできない。しかも、その時々の日中関係に強く影響を受けるという傾向を持つ。ある意味において、中国に残された日本時代の文書は今でも「現用文書」なのであって、現在の日中関係において有効な外交カードでもある。

また、中国東北というところは、中国共産党政権の出生にまつわる地域でもある。日本の敗戦直後から始まった国共内戦の当初、蒋介石の国民政府軍の前に劣勢に追いやられていた共産党軍は、ソ連軍が占領していた旧満洲（現東北）で態勢を立て直し、東北において国府軍との決戦に勝利を取ったことで、一気に中国本土を支配下に収め、現在の中華人民共和国を誕生させた。このように、中国東北が果たした役割は極めて大きかった。しかし、なぜ中国東北を握ったことが国共内戦の勝利に結びついたかを深く考えると、中国東北の基層にある満洲国の問題を避けて通れなくなってしまった。それは、下手をすれば満洲国の評価へも結びつきかねない問題でもある。これは、現在の中国政府にとって受け入れがたいことである。

また、中国東北については、張作霖・張学良の軍閥政権の文書は公開されているが、日本敗戦後の国民党政権時代の文書の公開は厳しい制限下にある。さらに、東北を占領していたソ連との関係にまつわる文書も同様の状況にある。

このように、現在の中国では、今なお日本に関わる歴史文書は、きわめてデリケートなものなのである。

なお、档案馆が所蔵するアーカイブズは、政治問題も絡まってなかなか自由に活用できるという状況ではないが、大学や図書館などが所蔵するものについては、比較的自由に活用できる。とくに、図書類に関しては、上海や天津など日本の居留地内にあった図書館を引き継いだところには、多くの日本語書籍が残されたが、これらの整理は、日本側の資金援助などによって急速に進み、目録も刊行されている。



「国史館台湾文献館」

■ これからの東アジアとアーカイブズ

さて、ここ20年のあいだに日本をとりまく周辺諸国ではアーカイブズ環境が大きく変化してきたことを述べてきた。では、日本においてはどのようなだろうか。

福田康夫内閣が国立公文書館の拡充を柱とした日本のアーカイブズ制度の整備を掲げて以降、公文書管理法の制定も含めた急速な動きが見られる。ただし、こうした動きは杜撰な管理によって年金記録などの問題が噴出したことに対する対処方策として、行政文書のレコードマネジメントを制度化するといった側面が強いものである。そこには歴史文書（近現代の）という概念はほとんど入ってこない。

台湾や韓国、そして中国において歴史文書は、現在と密接な関わりを持っているものである。すなわち、日本の敗戦後に生まれたこれらの国家にとって、国家と民族が記憶を共有し一つの国民概念を形成するために、過去に生成された歴史文書が必要不可欠な要素なのである。

これらの国々では、歴史文書によって自らの歴史を紡ぎ出し、その歴史を次代に語り継ぐことによって自らと国家のアイデンティティを創造する必要に迫られている。台湾においては中国との関係のなかから台湾の独自性を強調し、中台の差異化図らなければ中国に飲み込まれてしまうという危機感がある。また、韓国においては緊張した南北関係のなかから大韓民国の正統性を主張すると同時に過去の植民地支配という屈辱を克服して民族の自立を目指すことが求められている。さらに、中国で

も共産党政権の正統性を確保し多民族国家を中華民族として一体化させて維持していかなければならない。このように近代以降に人工的に形作られたこれらの国家では、歴史文書は極めて重要な意味を持つのであって、アーカイブズが重視されているのもそれなりの理由があるのである。

しかし、自然発生的な「クニ」と人工的に作られた近代国家との意識的・感覚的な区別が曖昧な日本において、民族や国家のアイデンティティを近代以降に生成された歴史文書に求めることはありえない。現在の日本国（正式国名としての）という近代国家が何を基盤にして成立しているのか、また何を守らなければ維持できなくなるのか、そういった問いに対して明確な答えを出せる人はほとんどいないだろう。ここに、日本と周辺諸国との根本的な相違があるのであって、時折問題化する歴史認識をめぐる軋轢の根底があるといえよう。

これから東アジアのなかで日本はどのように生きていくのかを考える際、単なる政治的・経済的・文化的交流といった表層的な部分に止まらず、彼ら自身や彼らの国家が依ってたっているアイデンティティとは何なのかを深く理解し、意識として何を共有できるのか何が共有できないのかを自己に問い続けていかなければならない。その回路としてアーカイブズは重要な役割を果たし得るのではなからうか。そして、アーカイブズを通じて歴史研究の発展、さらには歴史認識の相互理解（「共有」ではない）があるのではなからうか。

（本館アーカイブズ研究系の「東アジアを中心としたアーカイブズ資源研究」プロジェクトでは、日韓台の資料共有化研究を進めているが、本稿はその研究成果の一部である）



「遼寧省档案馆」

研究対談

(平成 20 年 12 月 2 日 国文学研究資料館 副館長室)

マティ・フォラー (ライデン大学 国立民俗学博物館・学芸部長)

鈴木 淳 (国文学研究資料館副館長・文学資源研究系教授)

▼鈴木 マティ・フォラー先生は、オランダのライデン国立民族学博物館の日本美術部門の学芸部長として、展示その他の運営に当たられ、また、ライデン大学の学生の指導もなさっていますが、今回、半年間ほど国文研に客員教授としていらっして、いかがだったでしょうか。

▼フォラー すごく楽しかった。オランダでの博物館における生活とは全然違いました。オランダでは、最初に届いてる電子メールをチェックして、その後、朝の9時から会議が続けてあります。

国文研での半年間は、自分の研究、特に狂歌本の調査をすることができて、すごく楽しかった。また、国文研の図書館は本当にすごくすばらしかった。ライデン大学の図書館に比べると国文学関連の資料は何でもあり、研究を進めるうえで、本当に良かった。

その他国内の資料を所蔵している機関にも行くことができて良かった。例えば、東洋文庫、大妻女子大学、国立国会図書館、蓬左文庫、岩瀬文庫及び狩野文庫に行くことができました。それと一番おもしろかったのは福岡・九大の富田文庫です。実は、明日も土曜日まで、仙台に調査に行く予定になっています。

▼鈴木 富田文庫の資料だったと思いますが、葛飾北斎の挿絵が入っている珍しい狂歌絵本について、以前、絵本プロジェクトの研究会でお話下さったと思います。

同じような資料は富田文庫には他にもあるのでしょうか？

▼フォラー これまでの調査でわかったのは、一般の版元が出版した本では、狂歌だけで、挿絵は余り入っていない。これは特に江戸の版元でのことです。大阪の版元ではよくアマチュアの狂歌師が自分で描いたものを、簡単な墨刷りで、略画を入れているようです。

この略画は本当に簡単な墨刷り絵です。小さいものですが、時々、すごくおもしろいものもあります。

江戸の普通の版元から出たものは、大体、天明まで挿絵が全然入っていません。

天明時代では、狂歌師がお金を出して、蔦屋重三郎が、本当にきれいな色刷り絵で作っています。また、北尾政演や、もちろん喜多川歌麿も挿絵を描いています。

あと、もう一つのカテゴリーは、特に岐阜と、尾張の名古屋の狂歌師が個人のアプリケーションをやります。

▼鈴木 それはいつ頃ですか。

▼フォラー それは本当に早いです。明和前に作られた本もたくさんあります。

有名な本当にいい出版社が、例えば永楽屋東四郎が製本所として作っている本もあります。彼が本の印刷はよくわかっていると思います。だから立派なものが出ています。

だけど、そういう本にも挿絵も大体入っていません。同じように立派な本は、狂歌師がお金をたくさん出して、それは天明、寛政、少し享和と文化の初めの話です。あと、本当に同じ、享和、文化・文政時代には、江戸の狂歌連、月並のものがよく出ています。そういうものは富田文庫ではたくさんあります。

▼鈴木 そうすると、挿絵が入っていない狂歌本もかなりあるわけですね。



▼フォラー 大体、初めは挿絵が入っていない。後で、おそらく文化の初めあたりから葛飾北斎と魚屋北溪、蹄齋北馬、宗理、北斎の弟子の砂山五清の挿絵が

入っているものが出てきます。文政になると、柳川重信が本当にすごくたくさんの狂歌本の挿絵をかいています。

▼鈴木 フォラー先生は、挿絵のない狂歌本も研究の対象にしているのですか。

▼フォラー この半年間の調査では、挿絵のない狂歌本も対象として調査しました。

これまでの調査では、あまり対象としていませんでした。それは、ヨーロッパとアメリカのコレクションに入ったものは大体絵のために集めたものです。ですから、今回の調査で見た、挿絵がないものを今までは全然見たことはありません。

だから、江戸のものだけではなく、大阪、京都、名古屋、岐阜、仙台も、いろいろな場所で出版した本が見られて、本当に良かった。

▼鈴木 日本の所蔵機関には、挿絵があまりない狂歌本を持っている所蔵機関は結構あるかもしれません。しかし、何となく関心がわかないというか、特に挿絵のない狂歌本や文政以降の月並狂歌本などは調査するのもたいへんという感じがするのですが。まして外国の研究者からすると、挿絵がないと、とても取りつく島がないような感じがするんですけれども。

先生としては、狂歌本を中心に、全体、それ以外の狂歌本もすべて一度ご覧になって、狂歌本全体のあり方を考えようということでしょうか。

▼フォラー はい。大抵のヨーロッパ人は、狂歌本をきれいな色刷りの挿絵が入ったものと考えます。しかし、それは部分だけで、そうではない。だから、この挿絵の意味を考えるために全部調べて、研究をする必要があると思います。

▼鈴木 しかし、それは月並俳諧の本と同じで、日本の地方にいた狂歌師がたくさん作っていますので、研究対象となる資料の範囲が広がるのではないかと思います。

そういう本を全部調べるとなると途方もないことになってしまうような気がするんですが……。

▼フォラー だけど、月並俳諧の本は、狂歌本よりもたくさん印刷してあると思いま

す。また、クオリティーも余り良くありません。しかし、月並の狂歌本は、毎月多分3丁4丁、時々8丁程出ていると思いますが、それらについても、印刷のクオリティーと挿絵のクオリティーは、本当にすばらしいと思います。

▼鈴木 ちょっと話題を変えさせてもらいますけれども、この前、江戸東京博物館で開催された北斎の展覧会がありました。フォラー先生は中心的にこの展覧会に関わったと思いますが、北斎が1822年かな、文政5年ごろにオランダの商館長に依頼されて、それでその肉筆の絵を北斎工房で描いて、それをオランダの人たちが持ち帰って、その大部分がライデン国立民族学博物館にあるのですね。

▼フォラー はい。15枚がライデン国立民族学博物館です。25枚はフランスのバリエ国立図書館にあります。

デ・ステュルレル¹⁾商館長が文政5年、絵の作成を北斎に頼んで、オランダの紙を出して、北斎が文政5年の江戸参府と文政9年の次の江戸参府との間にこの絵を描きました。

バリエ国立図書館の25枚は、デ・ステュルレルが亡くなったため、バリエに住んでいたその息子に渡りましたが、その息子は絵に全然興味がなかったため、バリエ国立図書館に寄贈されたのです。

▼鈴木 そうすると、オランダ商館長が個人的に北斎に絵の注文をして、描いてもらったということですか。

▼フォラー そうです。その他のケースも同じように個人の注文です。

文化13年にオランダの王様が王立珍品キャビネット（保管庫）を始めました。これはハーグでした。骨とう品を選んで、オランダに持って帰って、それをハーグに展示しました。最初の本当に大きいコレクションはプロムホフ²⁾のものです。彼が自分のお金で日本で、特に長崎・出島で、いろいろな物を集めて、オランダに持って帰りました。そしてその集めたもののなかから、部分的にこの王立珍品キャビネットに献呈しました。

▼鈴木 シーボルトはどうですか。

▼フォラー シーボルトはちょっと違います。彼はオランダの政府からお金をもらっ

て、そのお金でコレクションをつくって、後でこのコレクション、この珍品キャビネットに売った。後でわかったのは、部分的には1回ハーグの王立の珍品キャビネットに売った後で、2回目、バイエルンの王様にも売った。だから、この部分はうちの博物館には残っていない。今、ミュンヘンです。コレクションを売ったけど、大部分は自宅である今のシーボルトハウスで展示しました。



▼鈴木 シーボルトが集めたコレクションの中の本と浮世絵については、どのようにライオン国立民族学博物館に入ったのでしょうか。

▼フォラー シーボルトが集めたコレクションの中で、本と浮世絵は部分に過ぎません。彼の興味は産業分野にありましたので。

彼は例えば、陶器をよく調べました。日本の陶器はその制作工程などを秘密にしていたので、外国では同じように制作することができなかった。

▼鈴木 そういう場合には日本で作られた現物を持ち帰って、それをモデルにして制作したのでしょうか。

▼フォラー 多分そうでしょう。漆器についても箱の単位でいろいろな物を買った記録があります。彼のコレクションの目録にも書いてある。

他にも、例えば、蠟燭の蠟や日本のからし。シーボルトのコレクションは産業のコレクションです。

だけど、そういうコレクションは日本には余り残っていないのではないのでしょうか。

▼鈴木 そういう意味ではライオン国立民族博物館に行くと、当時の日本の生活ぶりを窺えるものが、何でも揃っているということになりますか。

▼フォラー はい。本当にそうです。文化・文政時代の町人の生活に関するもの

は、オランダ国立民族博物館に何でもあります。例えば、菌ブラシや傘もあります。日本には江戸時代の傘はほとんど残っていないのではないのでしょうか。

▼鈴木 先程、話が出た商館長が、北斎などの絵師に頼んで描いてもらった絵は、大体、当時の生活ぶりを示すような絵が多いですね。

▼フォラー そうですね。本物として集めるのは、それは大体小さい物です。例えば台所であれば、台所に関するいろいろな物を集めていますが、どのように、台所に配置するか、どのように使うか、ということを見てわかるように絵師に頼っていました。

端午の節句で使う物、こいのぼりで使う物も集めていますが、集めたものを実際には、どのように使用するか、ということを見て見るという感じですね。

▼鈴木 日本人の生活ぶりを知るために絵を注文しているような感じがしますね。

▼フォラー 江戸時代のオランダ人は通常は、長崎・出島しか基本的に行動できません。日本の生活に触れるのは少しだけです。ちなみに、「おくんち」のときも長崎に行ったようです。

▼鈴木 見物のためですか。

▼フォラー はい。長崎・出島から外出するのは、丸山を訪ねるときと、江戸参府の時です。しかし、江戸参府の時はオランダ人は3人だけ。商館長とアシスタント。2代目のアシスタント。最初のアシスタントはもちろん出島に残って、それと医者、この3人だけ少し日本の旅行をしました。そういうときは少し日本の生活を……。

▼鈴木 江戸参府の時ではどうでしょうか。長崎屋（江戸での宿泊先）から外にどれくらい出られたんですか。

▼フォラー それはわからないのです。

▼鈴木 日記などに書かれていませんか。

▼フォラー 書いてないようです。長崎の場合だと、少し歩こうと思った際に、大体1、2週間前に長崎の奉行所に外出して良いか、手紙を出して聞いていたようです。

その後、外出しても良いということになっ

たら、オランダ商館で2人か3人で出て、奉行所から護衛の侍が12人来たということもあったようです。

江戸でオランダ人が外出する場合は、侍はもっと多く付いたのではないのでしょうか。江戸での外出はとても難しかったのではと思います。

それに比べて大阪は大丈夫でした。どうしてなのかわかりませんが。

▼鈴木 江戸時代はそういう傾向はあるみたいですね。大阪と江戸の違いではないでしょうか。京都の場合も江戸ほどではないかもしれませんが、あまり自由がきかないようですね。長崎から江戸までやってきても、道中は、かなり行動の制限されているわけですね。

▼フォラー はい。江戸参府の時には、途中の小さな町、例えば箱根でいろいろなお店に入って、寄せ木細工もいっぱい買ったとの記録がありますが、しかし、大きな町の場合、特に京都は何もできなかった。江戸はその辺はわかりにくいのですが、大阪は自由でした。

▼鈴木 それだけに、日本人の暮らしぶりをいろいろ知りたいという気持ちは非常に強かったと思うんですね。それで、絵を注文したり、物をいろいろ、何でも集められる物は集めて持ち帰ったという感じがするんですね。

外国に渡った日本の物という、日本では浮世絵とか本とか、どうしても限られた物に目が行きがちになると思います。

オランダの人たちは日本のことを色々な面から知りたいという目的で物を集めるというのが多分基本的な考えだったと思うのです。ですから、私たちも絶えず、限られた物だけではなく、全体的なことへの関心というか、どういう物がオランダに当時の生活史料として渡っているかを全体的に見ていくということが非常に大切なことだと思えます。

▼フォラー ええ、本当にそうですね。

▼鈴木 もちろん美術的な関心とかも強かったとは思いますが、オランダの商館長や商館員などは、むしろ植物学とか動物学とか医学とか、その他文化的な面と

か、そういう関心の方が基本にあるわけですよ。それとか、あと、貿易をどういうふうに進めさせるかみたいなことも当然、彼らの一番の大きな仕事だったわけですよ。ですから、これからはそういう全体的な視野を持って、ちょっとオランダと日本のことを考えていかなければいけないと思っているんですね。

▼フォラー プロムホフを初め、オランダの商館長は、川原慶賀などの長崎の絵師に絵を頼んでいました。

しかし、シーボルトは違いました。彼が文政6年(1823年)日本に来た際、初めてこの川原慶賀が描いた絵を見て、駄目だと判断したようです。そして、手紙を本国のジェネラルに贈りました。その手紙で、ぜひ必要なものは絵師だということを書きました。

▼鈴木 絵師ってペインター？ それはちょっと意外ですね。

▼フォラー ペインター。だから、ジェネラルはカルベアド・デビアヌーフという人を日本に送りました。この人は、スイス人だけれども、オランダの東インド会社で働いていました。このデビアヌーフさんの絵がうちの博物館にも、少し残っています。

▼鈴木 そろそろ時間となりましたので、あと1つ2つだけ簡単な質問をしますので、お答えいただきたいのですが。まず、今までと全然違う質問ですが、日本の夏は暑くて大変だったんじゃないですか。どうだったですか。

▼フォラー それは本当に大変だった。一番大変だと思ったのは、建物、図書館や博物館に入れば、中は快適で涼しいです。しかし、そこから外に出ると暑かった。温度の差があって、とても大変でした。

▼鈴木 あと1つだけですけれども、この立川という場所はどうお感じになりました。この建物も含めて、何でもいいのですけれども。

▼フォラー 変な場所だと思いました。最初は本当にびっくりしました。例えば、この建物の廊下を歩く際に、最初はちょっと暗いのですが、少しすると電灯が自動的に

点きます。

▼鈴木 変な感じがしますか？

▼フォラー はい。廊下は突き当たりまで、大体50メートルぐらいありますが、壁だけ見えて、部屋の中にいる人が誰も見えません。また、大体ドアは閉まっています。

うちの博物館の事務所は全部ガラスになっています。だから、部屋の中が見えるようになっています。電気は毎日朝から夜まで点いています。

しかし、国文研の図書館は本当にいい場所だと思います。研究をする場合でも、ほしい資料を探してほしいと頼めば出てきます。この6カ月間の私の研究のベースとして、本当に良かったです。

▼鈴木 それでは最後におっしゃりたいことはありますか？

▼フォラー ライデンには、いろいろな日本の先生と、博物館、図書館や大学関係の人がよく来ます。だから私はすごくたくさん日本人を知っています。

私は毎年、大体3〜4回程日本に来ています。その場合、滞在するのは4日、5日、時々1週間で、長い場合でも10日くらいです。

今回は6カ月間は日本に滞在できて、長い時間をかけて研究もできて本当にすばらしかったと思っています。



¹ 1823年11月20日 - 1826年8月5日の間、長崎オランダ商館長。

² 1817年12月6日 - 1823年11月20日の間、長崎オランダ商館長。

平成 21 年度の講演会・展示

当館では、平成 21 年度に次の各事業を予定しています。

【講演会等】

■連続講演「能楽研究の世界（仮題）」 講師

法政大学名誉教授 表 章先生

開催予定時期 10 月～12 月 同様のテーマで 5 回講演を行います。

■サテライト講座「王朝文学の世界（仮題）」

開催予定時期 11 月頃 当館教員が都心の会場で、講座を行います。

【展示会】

■通常展示「和書のさまざま 一書誌学入門」

会期：平成 21 年 4 月 27 日（月）～6 月 19 日（金）

入場無料、開室時間：午前 10 時～午後 4 時半、土、日、祝休室

■人間文化研究機構連携展示「百鬼夜行の世界」

会期：平成 21 年 7 月 18 日（土）～8 月 30 日（日）

特別鑑賞料 300 円、開室時間：午前 10 時～午後 4 時半、日、祝休室

※ 8 月 10 日（月）は展示替えて休室します。

※本展示は、国立歴史民俗博物館の会場でも同時に開催します。

■特別展示「江戸の長編読みもの 一読本・実録・人情本」

会期：平成 21 年 9 月 25 日（金）～10 月 23 日（金）

入場無料、開室時間：午前 10 時～午後 4 時半、日、祝休室

■特別展示「物語の生成と受容」

会期：平成 21 年 11 月 9 日（月）～11 月 23 日（月）祝日

入場無料、開室時間：午前 10 時～午後 4 時半、日、祝休室

※ 11 月 22 日（日）、11 月 23 日（月）祝日は開室します。

■特別展示「江戸の絵本と歌仙絵」

会期：平成 22 年 1 月 8 日～2 月 5 日開催

ポルトガルにおける日本資料専門家欧州協会年次会議

2008 年 9 月 16 日～19 日ポルトガルのリスボンで開催された EAJRS（日本資料専門家欧州協会）第 19 回年次会議に鈴木副館長、古瀬教授とともに出席する機会を得た。当協会は欧州の日本研究機関間の情報交換や日本からの情報入手のため、研究者、司書を中心に活動を行っている。

会場のマカオ科学文化研究センターは、テージョ川にかかる大吊り橋「4 月 25 日橋」を間近に見る場所にあり、9 月のポルトガルはまだ夏の気候であった。50 余名の出席者は、欧州各国、北米等から集まり、日本からは国立国会図書館、日本文化研究センターなどが出席した。

会期中は 18 件の研究報告や機関・資料の紹介が行われ、当館からは、日本古典籍総合目録の現状や日本古典資料調査データベースやコーニツキ版欧州所在日本古書総合目録との新たな連携について紹介した。また、日程にはポルトガル国立図書館、エヴォラ図書館等の見学が組まれ、日本とポルトガルとの密接な関係を示すエヴォラ屏風文書など貴重なキリシタン資料を見ることができた。

報告の合間、海外からの出席者と情報交換を行い、資料館への要望を聞くなど大きな収穫となった。

（増井ゆう子）



会場のマカオ科学文化センター



エヴォラ図書館での見学

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 連携展示 「百鬼夜行の世界」開催のご案内

近年、想像力の文化や精神世界への関心の高まりとともに、その一環としての怪異や妖怪文化が注目を集め、学際的な研究が展開されています。人間文化研究機構を構成する国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館及び国際日本文化研究センターでは、これまで怪異・妖怪に関する共同研究や異界についての企画展示を開催し、開催する資料の収集を行ってきました。今回の連携展示は、それぞれの機関が蓄積してきた研究成果や資料をもとに、百鬼夜行にまつわる妖怪文化の新たな世界を描くものです。百鬼夜行絵巻の誕生は謎に満ちていますが、歴博会場はその成立に深く関わっていると考えられている絵巻の展示に主眼を置き、国文学会場では、芸文作品を含めて百鬼夜行の系譜をたどるとともに、江戸時代に花開く多彩な百鬼の文化を紹介します。

■主な展示品

(展示資料は二会場で異なります。また、期間中展示替えを行います。)

- 百鬼夜行絵巻 (真珠庵蔵・重要文化財)
- 百鬼ノ図 (国際日本文化研究センター蔵)
- 百鬼夜行図 (国立歴史民俗博物館蔵)
- 大黒舞 (国文学研究資料館蔵)
- 百鬼夜行屏風 (大倉集古館蔵)

■開催期間

2009年7月18日(土)～8月30日(日)

※休館日は、会場によって異なります。

■開催場所

国立歴史民俗博物館 〒285-8502 千葉県佐倉市城内町117

<http://www.rekihaku.ac.jp>

お問い合わせ 03-5777-8600 NTT ハローダイヤル 8:00～22:00

休館日:7月21日・27日、8月3日・17日・24日

開館時間:9:00～17:00(入館は閉館30分前まで)

入館料:一般420(350)円/高校生・大学生250(200)円/小・中学生無料

()内は20以上の団体※毎週土曜日は、高校生の入館が無料です。

国文学研究資料館 〒190-0014 東京都立川市緑町10-3 <http://www.nijl.ac.jp>

お問い合わせ 050-5533-2900(代) 9:00～17:45

休館日:7月19日・20日・26日、8月2日・9日・10日・16日・23日

開館時間:10:00～16:30(入館は閉館30分前まで) 入館料:一般300円/高校生以下無料

■関連行事

人間文化研究機構第10回公開講演会・シンポジウム

講師:小松和彦、徳田和夫ほか

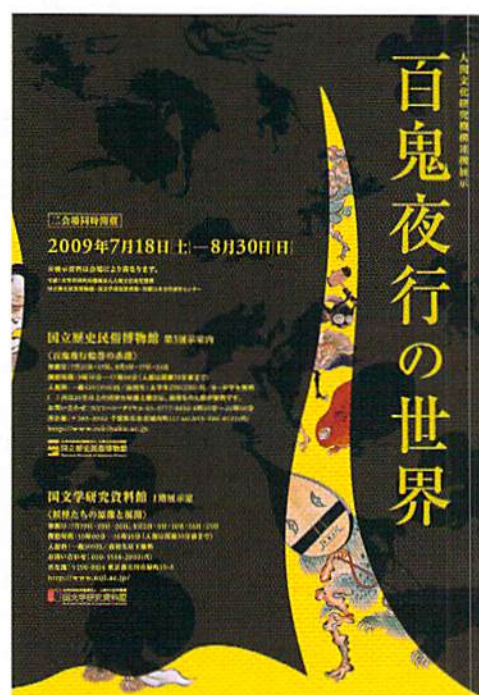
「百鬼夜行の世界」

要事前申込 定員600名(先着順) 聴講無料

日時:2009年7月11日(土) 13:00～17:00

後援:文部科学省

会場:有楽町朝日ホール



◎次号に当館会場での展示について、詳細をお伝えしますので、御期待ください。

久保木秀夫助教の中古文学会賞の受賞

平成20年10月4日に東京学芸大学で開催された中古文学会秋季大会において、当館文学資源研究系の助教の久保木秀夫さんが第1回中古文学会賞を受賞しました。受賞の対象となった論文は、『中古文学』第80号（平成19年12月）に掲載された「栄花物語本文再考—西本願寺本を中心とする—」です。論文は、当館の研究プロジェクト「王朝文学の流布と継承」（基幹研究A）の研究成果の一つで、平成19年度の中古文学会春季大会で行った研究発表に基づいて執筆したものです。

『栄花物語』の本文研究は、従来、鎌倉時代写の梅沢本に関心が集中していました。久保木さんは、「簡単に三条西家（小本）と西本願寺本とは本文上直接関係ありと断ずる事はできない」とされた松村博司氏の研究を受け、梅沢本が二種の形状を有する取り合わせ本であることに注目し、巻21以後の升形の本の本文を、西本願寺本の本文と比較検討して、両者に親近性があることを確認しました。そのうえで、梅沢本として取り合わされる前に存したであろう巻20以前の升形の梅沢本の存在を、伝慈円筆の巻19の断簡を活用して科学的に明らかめ、西本願寺本を関わらせることで広がる本文研究の可能性を示しました。そして、今後の研究の方向については、栄花物語の伝本は個性派揃いであるので、研究の目的に照らし、各伝本の個性を活かすかたちで読みを精緻に進めていくことが研究世界を豊かにしていくことにつながる、と更なる活性化に期待を込めました。これは、久保木さんが数年来地道に取り組んできた古筆切の研究が開花した論文であると言えます。

受賞式の挨拶では、これまでに受けた学恩への感謝の念と、真摯に研究と対峙していく決意とを表明し、満座の会場よりその前途を祝福されました。（江戸英雄）



授賞した久保木助教

相田満助教の山下記念研究賞受賞

情報処理学会に属する各研究会・シンポジウムで発表された、優秀な論文に対して贈られる平成20年度山下記念研究賞を、相田満先生が受賞され、平成21年3月11日に立命館大学草津キャンパスで開催された全国大会会場で授賞式が行われた。



授賞した相田助教

受賞論文である「暦象オントロジの構築—日本旧暦時代の文献分析支援のために—」（情報処理学会研究報告, 2007-CH-76, pp25-32 [8]）は、古典時代文献を分析する為の基盤情報となる暦日データベースの作成に関する報告と、その基本的な考え方や応用の構想に関する説明がなされたものである。

この暦日データベースの本質的特徴は、暦日データが、プログラムによる変換出力ではなく、ユリウス通日をキーとして、和暦、太陽暦、ユリウス・グレゴリオ暦を古代から現代に至るまで通時的に扱った101万件を超える実表の形式で構築されていることにある。この特徴により本暦日データベースは、現在のコンピュータが本質的に持つ暦の取り扱いに関する問題点を完全にクリアし、かつ広範な応用性を有することとなったのである。

また、論中では、さらにイレギュラーな記述を持った情報資源への対応や、人間の認知に暦日概念が大きく関わってきた歴史を踏まえての、人文研究者ならではの視点を踏まえた暦日オントロジの構想には説得力があり、日本前近代研究における、オントロジの意義や有効性を主張してきた先生の新たな展開を示すものともなっている。

この研究を遂行する為に、実表作成の量的な困難さなど様々な問題を乗り越える、相当のご努力が必要であったことは想像に難くない。そして創出された成果は、構築時の困難を補って余りある価値を有している。実際、人間文化研究機構資源共有化事業において、時空間システムの基盤データとしてこの暦日データベースが採用されたことも、その証左と言えるであろう。

この受賞を機として相田先生が、人文科学や情報学をはじめとする広範な領域でますますご活躍されることに、大きな期待を寄せたいと思う。

（京都大学地域研究統合情報センター・研究員 梅川通久）



授賞式の様子

総研大日本文学研究専攻の近況

1～3月に行われた当専攻の行事について、ご紹介します。

まず、入学試験。一次試験として修士論文又は受験者が評価を希望する既発表論文に対する審査を行い、合格者に二次試験として面接を行って、審議・決定します。21年度は、3名の新入生を迎えることになりました。意欲あふれる研究を期待したいと思います。

次に、博士論文の本審査。本審査は、年度前半に出願・審議される予備審査(専攻内)を通過した学生が、11月初めに出席、外部委員を含む審査委員の口頭試問及び学内外に開かれた公開発表会を経て、研究科教授会で議決が行われます(予備審・本審は半年ごとに行われるので、後期予備審、翌年度前期本審という選択も可能です)。途中、予備審査での不合格や、大幅な書き直しといった事態も当然あり得ますが、教員・学生とも、こうした厳しい姿勢が学位にふさわしいレベルの維持につながることを了解しあって、努力を重ねています。

20年度は新たに2名の博士が生まれ、3月24日、葉山本部での学位授与式に臨みました。これで、当専攻の学位取得者は5名(課程博士4名、論文博士1名)となります。

入試・博論審査の一段落した2月12日、本年度第2回の専攻特別講義を行いました。

今回の講師は、小林健二(「もうひとつの大江山鬼神退治の物語」)・寺島恒世(「新古今集を読むということ-江戸後期の注釈から-」)の両先生。10月から教授としてご着任いただいたのですが、すでにすっかり溶け込んで、期待通り充実した内容のお話を拝聴することができました。

1年にわたり、専攻の活動内容を紹介してきましたが、21年度からは、前専攻長の大高洋司教授が文化科学研究科長となり、中村康夫教授が新専攻長に就任します。新たな体制のもとで、一層の飛躍を期しておりますので、よろしくご支援をお願いします。(大高洋司)



高野瀬氏学位授与



学位授与式集合写真

表紙絵紹介

朝鮮総督府文書は、日本の朝鮮統治機関であった朝鮮総督府が作成したものであり、1945年の敗戦後、米軍によって接収され、その後、大韓民国政府へ引き継がれた。その後、1969年に国家記録院の前身である政府記録保存所が設置されると、同所の管理となった。政府記録保存所が引き継いだ朝鮮総督府文書は、日本時代の朝鮮総督府文書庫に保管されていた非現用文書1万4070冊であったが、この後、現在までに中央政府機関および地方機関で保管されていた現用文書1万7482冊が移管され、合計3万1552冊にのぼっている。

現在、朝鮮総督府文書の原本は大田の国家記録院本部に保管されているが、城南市または釜山市の分館に移管する計画が進んでいる。



朝鮮総督府文書
(韓国国家記録院所蔵)

● 催し物のお知らせ

和書のさまざま —書誌学入門—

会期：平成21年4月27日(月)～6月19日(金)

本展示では、《本》のさまざまな形態を体系的に紹介しながら、日本の古典籍がどのように読み伝えられて来たのかをご覧ください。本展示が、書誌学の入門としてのみならず、和書の魅力を感じていただく好機となれば幸いです。

入場無料、開室時間：午前10時～午後4時半、土日休室



【平成21年度アーカイブズカレッジ 受講者募集】

記録史料の保存と利用サービス等の業務を担う専門職員の養成のため、毎年度開催しているアーカイブズカレッジの受講者を募集しています。詳しくは、当館 Web ページ (<http://www.nijl.ac.jp>) をご覧いただくか、当館企画広報係 (050-5533-2910) にお問い合わせください。ご応募お待ちしております。

長期コース：期間 7月21日～9月25日、会場 国文学研究資料館等

短期コース：期間 11月9日～11月20日、会場 佐賀大学

● 次号までの閲覧室の開室予定カレンダー

■青は休館日 ■黄色は土曜開館日

5月

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24/31	25	26	27	28	29	30

6月

日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

7月

日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国文学研究資料館

〒190-0014 東京都立川市緑町10-3

Tel.050-5533-2910 Fax.042-526-8604

発行日 平成21年6月1日

編集 国文学研究資料館広報出版室

印刷所 三鈴印刷株式会社

©人間文化研究機構 国文学研究資料館